

Title	転調する身体 : 中枢神経系の障害を持った人に対する理学療法を考え直す
Author(s)	玉地, 雅浩
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46593
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	たまちまさひろ 玉地雅浩
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19933 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	転調する身体—中枢神経系の障害を持った人に対する理学療法を考え直す—
論文審査委員	(主査) 教授 中岡 成文 (副査) 教授 鷲田 清一 講師 本間 直樹

論文内容の要旨

申請者は医学的リハビリテーションの一分野である理学療法に従事している。その対象となる患者の 60%は脳卒中後遺症やパーキンソン病という中枢神経系に障害を持っている人である。生活していこうとする環境から要請される感覚・知覚的意味が交流を通して変化していくなかでも、身体として生きていく上で捉えるべきものを捉えることが可能になっているという、ある意味で不可思議な事態を解明するために、主として現象学者メルロ＝ポンティの「転調」(modulation)という概念を援用している。

本論文は序論、結論以外に 3 部全 11 章からなっている。

第 1 部では、脳卒中後遺症の人にとって上を向いて寝るということすらも安定した姿勢ではなく、非常に不安を感じながら過ごしている事態をその理由と共に考察した。現在立ち現われている身体とその身体に関係づけられている身体とのつながりとの関係で姿勢や動きを考える必要がある。そういう連続性が重要であることを明らかにしている。すなわち、じっと上を向いて寝ているように見えるが、回転モーメントを感じながら寝ている人にとって支持面は一つではなく、刻々と変化していく。そんな支持面に対応しようとする身体が繋がっている中で上を向きつつ寝るということは、外部観察から受ける印象とは異なり、脳卒中後遺症の人が様々な反応や動きを伴いながら上を向いて静止していることを意味する可能性がある。

次に第 2 部では、パーキンソン病の人の移動時の問題が「まなざし」(regard)や「規範」(norme)という概念を援用しながら考察される。パーキンソン病の人は、寝返りができないのに歩けたり、階段が登れるのに平地では足がすくむというように、普通では考えにくい病態をも特徴としている。従来、このような現象を病気の特殊性から説明したり、怖がりという性格ややる気が無いためだと判断されることもあった。これに対して本論文では、これまであまり検討されてこなかったパーキンソン病の人の眼の機能に着目し、見る、歩くということについて考察する。そのためには「一つの全体である系としての身体」というように周囲の環境との関係の中で生まれる身体や動きに着目し、単に眼が受動的に対象を受け取るのではなく、身体全体が視覚システムとして働く中で対象を捉えることにより「見る」ことが成立していることが判明した。そのように周囲の環境と密着した関係でいるからこそ、患者は安心して移動ができると指摘している。

次に第 3 部では、われわれの身体が周囲の環境と密接に関わっており、自分にとって差し迫った意味、実存のリス

ムに応じているなかで感覚や知覚が生まれ、身体の動きや行為が意味を持つという点を、リズムという概念を軸にして考察した。リズムは聴覚に特化されることが多いが、むしろそれを歩いたり、話したりという、生きていく上で必要な意味を区切って行くようなものとして考えることにより、我々の内と外という問題を浮き彫りにしていく。周囲の環境との緊密な関係があればこそ、生理学的な視覚機能のモジュールは役立つのであり、一つ一つのモジュールを積み重ねてもパーキンソン病の人の特異な現象、特に移動時の問題を解明することはできない。身体全体を一つの視覚システムとして考え、「身体が見る」ということについての洞察が肝要だと強調されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、脳卒中後遺症やパーキンソン病という中枢神経系に障害を持つ者の動作に関する考察であり、一見すると人体の特異なケースに関する理学療法的研究であるという印象を与える。しかし本論を熟読すればこうした印象は大きく裏切られることになる。申請者は、理学療法士としての豊富な経験とそこから生まれる問題意識に立脚し、これらの事例に内在的な検証を繰り返すとともに、現代の神経生理学や認知科学による身体と環境に関する文献を広範に踏査しつつ、それらの知見をメルロ＝ポンティの身体論に関する丹念な読み込みによってまとめ直し、身体が空間に「馴染む」という経験、まなざしと視野の関係、身体のあらゆる側面で働く「実存のリズム」など、身体をもって生きるという人間の本質的な部分に関する普遍的な射程をもつ論考を展開している。

メルロ＝ポンティが、当時の生理学や心理学を批判しながら『行動の構造』『知覚の現象学』を著したように、申請者は「一つの全体である系としての身体」というメルロ＝ポンティの思考を受け継ぎながら、身体をもって行為することの本質記述を試みる。現象学の方法論に関する研究や遺稿集の読解に埋没しがちな現象学研究のなかで、経験科学と対話しながら記述をおこなうメルロ＝ポンティ以降の現象学研究の希有な例と言っても過言ではない。とりわけ、科学批判としての現象学の威力が十分に活かされているのは、身体の諸機能を「モジュール」と呼ばれる機能単位に切り分けて観る生理学や理学療法の考え方では、状況のなかの一つの動作の成立や不成立でさえ十分に説明できないことを鋭く指摘する点においてである。

問題点としては、記述のために投入される「リズム」「馴染む」などのことばについて概念規定がやや不十分であることが指摘されようが、しかし、具体例を多分に含む全体としての豊かな記述がそれらのことばの使用を十分に正当化して余りある。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。